

生きる 光と音のない生

荒美有紀さん(24)は、フルートが得意で東方神起が好きで、東京の大学生だった。体中の神経に腫瘍がでる難病、神経線維腫症2型を発症、一昨年に聴力を、昨年春には視力を失った。一切の光と音を奪われた孤独。彼女に出あって考えた。人の強さとは、きずなどは、なんだろう。



クリスマス会に現れたサンタに驚く荒美有紀さん(中央)。ひげを触って確かめ、笑顔を見せた。24日午後、東京都板橋区、遠藤真梨撮影

「私って何」問いながら

目と耳の力失った女子大生

24日、荒さんは、同じ盲ろう者が集まるクリスマスパーティーの会場にいた。退院して半年、荒さんはすでに人生を前へと歩き始めていた。

目が見えず耳も聞こえない盲ろう者。点字を伝える手段の一つ、指文字を、驚くほどの速さで習得した。点字変換ができる情報端末も、すぐ使いこなした。

今春、明治学院大仏文科の4年に復学。大学近くに

盲ろう者

弱視や難聴を含め、視覚と聴覚の両方に障害がある人。推計では全国に約2万3千人。日本での全盲ろう者の大学進学率は、荒さんで4例目。著名人としてはヘレン・ケラーや島智・東大教授がいる。

「なにに」がムズムズ居心地悪い、と言う。障害を持ったことで、底上げされてる気分。私は誰かを感動させるために、生きていくんじゃない。

手のひらに文字 新しい仲間たち

大学は指文字通訳者やパソコンでのノート筆記者を雇用し、授業を保障した。通学・帰宅時の付き添いは大学のサークル「点訳会」が引き受ける。点字を学ぶ10人ほどが最初は気遣いしつつ、やがて友達として、彼女とつながった。

一人で歩けない ポンコツみたい

でも彼女がつづるブログに時々出てくる、こんな記述が気になった。

そもそも生きるって、自分って、なんだろう？

誰かのお供がなければ外を歩けなくなったら私って、首にリードを巻いた犬の気分になる。私ってポンコツじゃないか、と。

秋、取材を申し込んだ時も、荒さんはためらった。重い障害があるのに頑張

なぜ私の周りには、こんなにも温かくて優しい人があふれているんだろう。目と耳が使えていた頃より幸せなのかも……。

緊張と不安抱え それでも社会へ

11月初め、大学の学園祭があった。

車いすですべて来た荒さんのものと、入れ代わり友人たちが寄ってきて、手に言葉を送ってゆく。

ソーセージのにおい、車いすにぶつかると、にぎわいに囲まれ、その一部を感じとり、彼女は楽しんで、とばかり思っていた。

ところが、本当は不安と緊張とで泣きたいほどだったと、後で知った。

健康であることが当たり前。前の大多数の人。何もでき

「こんな私を変わらず受け入れてくれるだろうか。あの頃を思い出すと、胸がしめつけられる。今の自分を否定してしまいたい。でも見えて、聞こえていた22年間の荒美有紀も、私の大切な一部だから。何日も考え抜いた文面のメールを、送信した。」

出身地の栃木県で過ごした中学・高校時代、仲良しの4人組がいた。よくけんか、旅行した。その仲間

に、自分の今の状態をまだ知らせていなかった。

闘病のことは伝わっていない。だが「会いたい」とメールが来ても「お互い忙しいよね」とはぐらかしてき

た。見えて、聞こえるふりを、してきた。

こんな私を変わらず受け入れてくれるだろうか。あの頃を思い出すと、胸がしめつけられる。今の自分を否定してしまいたい。でも見えて、聞こえていた22年間の荒美有紀も、私の大切な一部だから。何日も考え抜いた文面のメールを、送信した。

（石橋英昭）